

# 文章作成能力養成のための教育手法確立に向けての 基礎研究

著者	岩崎 真梨子, 川守田 礼子
著者別名	IWASAKI Mariko, KAWAMORITA Reiko
雑誌名	八戸工業大学紀要
巻	35
ページ	91-106
発行年	2016-03-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1078/00003562/">http://id.nii.ac.jp/1078/00003562/</a>

# 文章作成能力養成のための 教育手法確立に向けての基礎研究

岩崎 真梨子<sup>†</sup>・川守田 礼子<sup>††</sup>

## A Basic Study for Establishing an Educational Method to Develop Text Writing Skills

Mariko I WASAKI<sup>†</sup> and Reiko KAWAMORITA<sup>††</sup>

### ABSTRACT

This study aims to create a basis for teaching text writing skills in Hachinohe Institute of Technology. This year, we will grasp the current state of text writing skills of our students and extract some problems in text writing through learning situations in text writing assignments provided in our Japanese expression course. We plan to compile an entry-level text writing manual describing precautions for text writing by taking advantages of results of this study.

**Key Words:** college students, text writing, problem extraction

**キーワード:** 大学生, 文章作成, 問題点抽出

### 1. はじめに

「読む・書く・話す」といった日本語コミュニケーション能力は、大学における学習の基盤をなす重要なファクターである。八戸工業大学（以下、本学）のカリキュラムにおいて、日本語コミュニケーション力養成を主たる教育目標に掲げている全学共通科目は、「日本語表現法」および「実践日本語表現」（いずれも「総合教養科目」群に属する）の2科目であるが、この2科目以外にも、レポート作成、文献読解、口頭発表等、日本語コミュニケーションに関わる活動は

多岐の科目にわたっており、卒業研究および卒業論文執筆に取り組む4年次まで継続的かつ重層的に教育が行われているはずである。

しかし昨今、4年次の卒業論文執筆や就職活動における履歴書作成時になって初めて「文章が書けない」ことが急に問題視され、学習者にとっても指導教員にとっても大きな壁になっている場合がある。平成27年度本学で試行された前期学期末達成度評価アンケート結果<sup>1)</sup>によれば、20項目の修得因子のうち、「日本語コミュニケーション・スキル」の達成度評価において、4年生の1.7%が達成度ゼロ評価と回答していることがわかった。これは、4年生の履修科目数自体が概して少ないということも影響しているであろうが、研究活動が本格化する時期にあって、依

平成28年1月8日受付

<sup>†</sup> 感性デザイン学部感性デザイン学科・講師

<sup>††</sup> 感性デザイン学部感性デザイン学科・准教授

<sup>1)</sup> 太田口和久：教育目標の達成度評価，八戸工業大学第18回教育改善に関するシンポジウム・第9回大学院FD研修会，2015-12-25

然、日本語コミュニケーション力に何らかの問題を抱えている層が存在することを示しているのではないだろうか。

とりわけ、日本語コミュニケーションに関わる科目を担当し、これまで指導にあたってきた立場から見ると、本学学生の日本語コミュニケーション力として最も懸念されるのは「文章作成」分野である。4年次になってからの個別の相談の内容も、文章作成に関するものが圧倒的に多い。指導にあたって実感するのは、本学学生の文章作成能力にはかなりの個人差があり、文章作成に強い苦手意識を持っている層が少なくないという点である。そのため、先に挙げた共通科目「日本語表現法」や「実践日本語表現」では、レポートや記述式の課題など文章作成を含む学習分野において、そのような苦手意識の強い受講生に大幅な作業の遅れが生じ、全体指導に支障をきたす場合がある。さらに、作成した文章のどこに問題があるか、どれほどのレベルの問題なのかは、個々の学習者によってそれぞれ異なるという非常に複雑な状況がある。現在は、主に添削という個別指導によって対処しているが、それにも時間的・労力的に限界があり、教員による指導の手がなくなれば元にもどってしまう（もしくは書けなくなってしまう）というのが実情である。文章作成における学習態度はおおむね受動的な傾向が強く、教員による直接的かつ具体的な指導を待っているなど、自発的な活動には程遠いというのが現状である。学習者が、文章作成における自身の問題点を理解し根本的に解決しようとするのではなく、むしろ、「このように書けばよい」という模範解答のみを安直に求める傾向がある。

日本語コミュニケーション力、特に文章作成能力に関わるこうした状況を受け、本研究では、本学における文章作成能力指導の基盤構築および有効な教育手法の確立を目的とする。その第一段階として、今年度は、日本語表現関連科目において文章作成の課題を課し、その学習状況と実施結果から、本学学生の文章作成能力の現状把握と文章作成に係る問題点の抽出を行う。

文章作成において何が問題になっているのか、どこにつまずく傾向にあるのか、本学学生が文章作成上注意しなければならない共通項を明らかにする。これらの分析を踏まえ、次年度以降、文章作成上の注意事項をまとめた本学学生向けの初歩的な文章作成マニュアルの作成を行い、さらに、それを用いた文章作成の主体的学習を促す教育体制の構築を目指す。

本稿では、今年度取り組んだ文章作成課題を通じた本学学生における文章作成能力の現状把握について報告する。実施対象科目は、国語科教員が担当しており、かつ、文章作成課題を行っている科目として、平成27年度後期開講科目から、「日本語表現法」および「主題別ゼミナールⅠ」とした。いずれも全学共通の総合教養科目で、受講者は1年生である。各科目の概要は、以下のとおりである。各科目の実施結果に関しては、次章以降でそれぞれ報告する。

#### 1) 日本語表現法

全学部1学年後期に開講されている選択科目で、平成27年度は約300名が受講している。学科ごとのクラス編成としており、川守田・岩崎両名が担当している。高等学校までの国語の復習を含みつつ、語彙領域から文章表現領域まで幅広い内容を演習中心に学習する。本科目の実施結果に関しては、第2章で述べる。

#### 2) 主題別ゼミナールⅠ

全学部1学年後期に開講されている選択科目で、複数教員がそれぞれテーマを設け、ゼミナール型に行う科目である。岩崎担当のゼミでは、「方言」「日本語学」をテーマとして開講しており、平成27年度は81名が受講している。本科目の実施結果に関しては、第3章で述べる。

## 2. 日本語表現法

### 2.1 科目概要

「日本語表現法」は、全学部全学科1学年後期

に開講される選択の総合教養科目の一つである。選択科目ではあるが履修率は比較的高く、学科ごとのばらつきはあるものの、平成27年度全学部平均で89.2%、受講者数は296名（再履修生除く）である。教育内容は全クラス統一であるが、本稿では川守田担当の3クラス144名（機械情報技術学科42名、バイオ環境工学科32名、土木建築工学科70名）を対象として実施した内容について報告する。

本科目の教育目標は、「読む・書く・話す」の三つの領域にわたる基本的な日本語表現能力の養成にあり、受講生が、高等学校までの国語学習内容を復習しつつ、大学生として必要となる日本語表現に関わるポイントについて、演習問題を活用して実践的に学べるよう講義内容を組み立てている。語彙や語法に関する基礎的な事項から、論文・レポート作成に関わるデータ分析や文章構成、さらに敬語や手紙文といった社会人として求められるコミュニケーションスキルに関わる応用的な事項まで、幅広く扱っている。テキストは、米田明美・藏中さやか・山上登志美共著『大学生のための日本語表現実践ノート』<sup>9)</sup>を使用している。「日本語表現法」の授業計画および講義で扱う主な項目を表1に示す。

表1 「日本語表現法」授業計画

授業回	分野	項目
第1回	導入	ガイダンス、語彙力確認プレテスト、授業前アンケート
第2回	語彙	同音同訓異義語、四字熟語、慣用表現、ことわざ、故事成語
第3回～第5回	語法	文の構造、主述関係、修飾関係、接続詞、副詞、助詞
第6回～第9回	敬語	敬語の種類・用法、基本語彙、敬意表現、電話応対
第10回～第11回	文書	案内文、ビジネス文書、ビジネスメール
第12回	要約	文章構成、パラグラフ構成、文章読解、要約文
第13回～第14回	分析	文章構成、論文記述の注意事項 グラフ・表の分析、考察
第15回	総括	全体の復習、要点確認
第16回	試験	

表1のうち、文章作成課題を課しているのは、次の三つの演習である。

- 1) 手紙文作成（第10回～第11回）
- 2) 要約文作成（第12回）
- 3) データ分析文作成（第14回）

各演習における流れは次のとおりである。

まず、授業担当者により課題の概要および基礎的知識や注意事項に関する説明を行った後、テキストの演習問題に従って課題プリント上で文章作成作業を行う。授業担当者は授業の最後に成果物として課題プリントを回収し、次時に個別添削を行ったプリントを返却し、共通して誤りの多かったポイントに関する注意および全体講評を述べる。あわせて受講生に「文章作成まとめシート」を用いて各演習内容のふりかえりをさせ、その結果をまとめた。各演習内容や学習状況、まとめシートの結果に関しては、次項でそれぞれ詳しく述べる。まとめシートの結果に関しては、平成27年12月までに実施した分までを扱うこととする（第14回「データ分析文作成」演習は平成28年1月に実施予定のため、まとめシートの結果提示は除く）。

なお、「日本語表現法」の成績評価は、第16回実施の定期試験成績（100点満点）で行っており、上記三演習課題の評価は含めていない。各学習分野に対する「書く」活動を通じた実践的な理解を主眼においた課題として位置づけている。定期試験では、作成作業を通して得たであろう各学習分野に関する基礎的知識の確認を行っている。

また、「日本語表現法」では、高等学校までの国語の学習歴と、国語（日本語表現）学習に対する意識を把握する目的で、第1回授業時に「授業前アンケート」を実施している。質問項目は、①小論文作成・文章要約に関する高等学校までの学習経験の有無、②日本語検定の受検経験の有無、③日本漢字能力検定の受検経験の有無、④国語分野（語彙・漢字、文法・語法、文章読解、文章表現、口頭表現、敬語、手紙文の各分野）の得意・不得意意識について、⑤強化すべきと考えている国語分野（語

彙・漢字、文法・語法、文章読解、文章表現、口頭表現、敬語、手紙文、就職試験対策の各分野)について、の5項目である。本調査の文章作成に関わる質問①、④、⑤の結果を抜粋し、それぞれ図1～図3に示した。

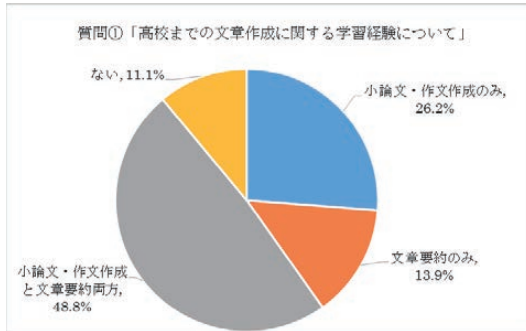


図1 高校までの文章作成に関する学習経験

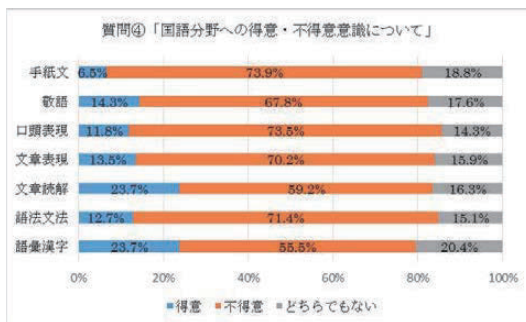


図2 国語分野の得意・不得意意識

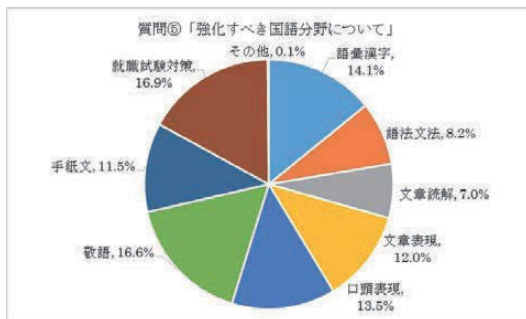


図3 強化すべきと考えている国語分野

図1によれば、高等学校までの授業や講習などで、小論文・作文作成の指導を受けてきている

学生が26.2%、文章要約指導を受けてきている学生が13.9%、その両方を受けてきている学生が最も多く48.8%という結果であった。すなわち高等学校終了時まで約9割の学生が文章作成に関連する指導を受けてきていることが分かる。逆に、約1割の学生は文章作成の訓練機会のないまま入学していることになる。

図2は、国語分野に対する得意・不得意意識の割合をまとめたものである。語彙漢字分野55.5%、文章読解分野59.2%を除き、他の分野に対してはおよそ7割前後の学生が不得意意識を持っていると回答している。文章表現分野に関しては70.2%の学生が不得意意識を持っていることが分かった。

図3は、今後大学で強化すべきと考えている国語分野を上位三つまで挙げさせ、その総数をまとめたものである。最も多いのが就職試験対策16.9%で、次いで敬語16.6%、語彙・漢字14.1%という結果であった。これらに比べ、文章表現スキルを強化すべきと意識している層は12.0%と若干少ない。大学1年生の時点では、長文読解や文章作成を求められる機会が少なく、不得意意識は持ちながらもスキル向上の必要性を実感する段階ではないともいえる。対して、就職全般に対する対策の必要性を感じている割合は高く、それに関連付けた国語課題は学習者の興味関心につながる可能性がある。こうした背景もあり、「手紙文作成」を文章作成演習の一つ目に組み込んだ。

## 2.2 手紙文作成

昨今の大学生は、私的なシーンで手紙文を作成する機会はほぼないと考えられるが、学業やサークル活動、就職活動に関わるシーンでは、公的な手紙文を作成する機会は確実に生じる。たとえば、インターンシップや教育実習等の研修先に対して礼状を送る、あるいは、採用応募書類を志望企業に送付するなどである。高等学校までの学習経験の乏しい分野でもある。

本演習では、テキストの演習問題に即し、次の三種の手紙文作成を課した。各課題の詳細は



以下のとおりである。

- 1) 案内状：幹事として高校の同窓会開催を同級生宛に通知する
- 2) ビジネス文書：上司の指示を受け、会議開催を関連企業宛に通知する
- 3) ビジネスメール：次回打ち合わせに関するメールを社外の担当者宛に送信する

授業の進め方は次のとおりである。まず前半に、授業担当者が手紙文に関わる基本的な事項、たとえば前文・主文・末文の構成、左寄せ・中央寄せ・改行などのレイアウト、頭語・結語などの用語やルール、挨拶文の文例、よく用いられる敬語表現、日本語表現上の注意事項などに関して、テキストの見本（手紙文フォーマット）を参照しながら説明を行った。その後、30～40分程度の時間を設け、手紙文作成に取り組ませた。作成作業中も、手紙の目的に応じて見本のどの部分をアレンジすればよいのか、どのような表現や言葉遣いが妥当なのかについて、板書や口頭で随時補足説明を行った。

学習状況を観察すると、作業序盤は、慣れないフォーマットを用いること、および、手書きすることに戸惑いを示しているものの、全般的に、見本を見ながらの作業に安心感を持って臨んでいる傾向が強い。成果物を見ても、細かいミスはあるが大きな逸脱はほぼなかった。ただし、前時に学習した敬語表現になじんでいない学習者が多く、その点の誤りが最も目立った。

三種の手紙文作成演習が終了してから、まとめシートを用いて、手紙文作成全般を通して、「①できたこと」「②難しかったこと」「③できなかったこと」の三点によるふりかえりを行った。以下、「①できたこと」の結果を表2および図4、「②難しかったこと」の結果を表3および図5、「③できなかったこと」の結果を表4および図6にそれぞれ示す。なお、これらのデータに掲げた「分野」および「項目」とは、自由記述式の回答内容を本演習での学習活動ポイントに即して整理したもので、「手紙基礎」「手紙応用」「表記基礎」三分野全11項目とした。回答者数は、機械情報技術学科34名、バイオ環境工学科

27名、土木建築工学科59名である。複数項目を回答している者が多く、回答数の累計は、「①できたこと」228、「②難しかったこと」158、「③できなかったこと」130である。

表2 手紙文作成まとめシート「①できたこと」

分野	項目	回答数
手紙基礎	形式、構成、基本要素、ルール	60
	レイアウト	71
	作成手順	21
	挨拶文、丁寧な言葉遣い	38
手紙応用	目的や相手に合わせた敬語表現	10
	フォーマットの使い分け	17
	記載内容の精選、正確さ	5
	オリジナリティの加味	0
	相手への配慮	4
表記基礎	誤字脱字など	0
	文字のバランス、見やすさ	2

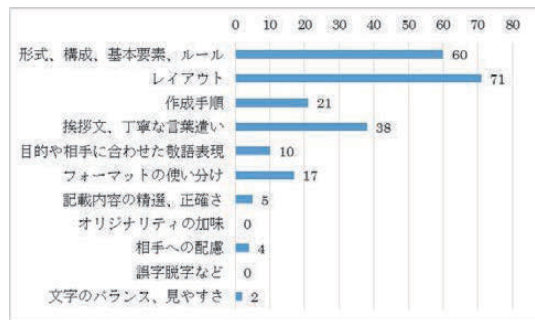


図4 手紙文作成まとめシート「①できたこと」

表2および図4によれば、「①できたこと」として、手紙の形式、構成、基本要素、ルール、および、レイアウトなどを挙げている割合がそれぞれ60名、71名と最も高く、この二項目で回答総数の約6割を占める。手紙文作成のための基礎的な知識に関する理解は十分であるといえる。学習状況を見ても、手紙文フォーマットを活用して必要な箇所のみをアレンジすればよいという認識の下に作業するのはそれほど負担ではなかったようである。また、手紙文では口語表現ではなく書き言葉にふさわしい丁寧な言葉遣いを採用しなければならないというルールに対する

理解を挙げている者も次いで38名と多かった。手紙文という日常的に使用することの少ないコミュニケーションツールに初めて取り組むことに新鮮さを感じたと回答した学習者も見られた。

表3 手紙文作成まとめシート「②難しかったこと」

分野	項目	回答数
手紙基礎	形式、構成、基本要素、ルール	5
	レイアウト	19
	作成手順	3
	挨拶文、丁寧な言葉遣い	59
手紙応用	目的や相手に合わせた敬語表現	29
	フォーマットの使い分け	3
	記載内容の精選、正確さ	4
	オリジナリティの加味	3
	相手への配慮	3
表記基礎	誤字脱字など	1
	文字のバランス、見やすさ	29

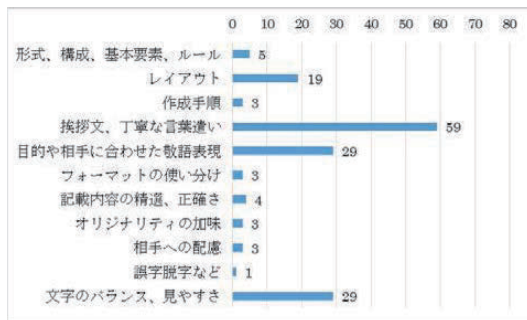


図5 手紙文作成まとめシート「②難しかったこと」

表3および図5の「②難しかったこと」には、挨拶文や丁寧な言葉遣いを挙げている者が59名と最も多いことがわかる。これは回答総数の約4割を占める。学習者自身が普段に使用している日常語とは異なる丁寧な言葉遣いへのシフトチェンジが必要だとは理解していても、実際に適した言葉を選ぶことに難しさを感じているようだ。次に、目的や相手に合わせた適切な敬語表現の使用を難しいと感じている者が29名と多く、総数の約2割に相当する。公的な場面でのコミュニケーションの経験不足や、敬語表現への自信のなさが表れているといえる。また、手紙文独特の

レイアウトや文字表記そのものに難しさを感じている層も同数の29名であった。文字のバランスを整えるのが大変だった、見やすい表記となるよう気を遣って疲れたなどの回答が見られた。

表4 手紙文作成まとめシート「③できなかったこと」

分野	項目	回答数
手紙基礎	形式、構成、基本要素、ルール	9
	レイアウト	24
	作成手順	0
	挨拶文、丁寧な言葉遣い	20
手紙応用	目的や相手に合わせた敬語表現	10
	フォーマットの使い分け	6
	記載内容の精選、正確さ	13
	オリジナリティの加味	5
	相手への配慮	3
表記基礎	誤字脱字など	21
	文字のバランス、見やすさ	22

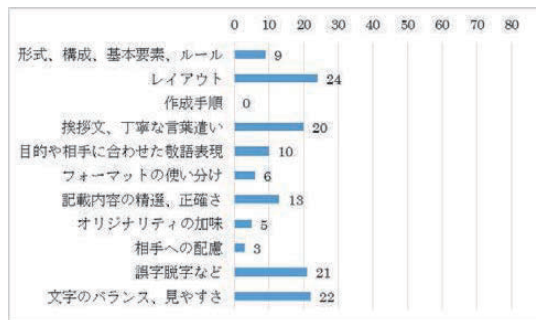


図6 手紙文作成まとめシート「③できなかったこと」

表4および図6によると、「③できなかったこと」では複数項目へのばらつきが見られる点が特徴的である。これは、最終的に達成できなかったポイント、つまり、文章作成上の問題点が学習者ごとに多様であることを示している。表記や文字バランスという文章表現の基礎的項目を挙げた層は、成果物においても、単純なレイアウトミス、結語や伝達事項等の記載内容漏れ、誤字など、不注意によるケアレスミスが多いことがわかった。逆に、成果物のレイアウトや表記に問題がなく、課題への丁寧な取り組み姿勢がうかがえる層は、言葉遣いの適切さや敬語表現

のバリエーションなど、より高次の項目を挙げていることがわかった。また、回答数は少ないが、決まったフォーマットにおいても、相手への配慮やオリジナリティなど応用発展的な要素をさらに加えたかったと回答した者もいた。

### 2.3 要約文作成

大学では、レポートや論文を作成する際、課題文や収集した情報、先行論文等の内容を正確に読み取り理解する文章読解力とそれを簡潔にまとめる要約力が必要となる。そこで二つ目の演習として、テキストの演習問題に即し、二千字程度の論説文を読み、200字の要約文を作成するという課題を課した。課題文は鷺田清一著『死なないでいる理由』「いのちはだれのものかー生命操作をめぐる」の一節である。人の身体や生命は他の身体とのまじわりにおいて成り立つのだという主題の文章である。学習者にとってなじみのないテーマのためか、内容理解に苦労している様子が見ええた。

授業の進め方は、次のとおりである。前半に要約に関わる基本的な事項、たとえば、定義や手順、論理的文章の三段構成「序論・本論・結論」、パラグラフ構成とトピックセンテンスの定義、主題把握におけるトピックセンテンスの抽出や二項対立構図の把握の重要性、文章読解のポイントとなる接続詞・指示語の確認、日本語表現上の注意事項などに関する説明を行った後、パラグラフごとの音読およびトピックセンテンスの確認、三段構成を踏まえた問題提起と筆者の主張の確認を全体で行った。それらを踏まえ、後半の30分程度を用いて、各自要約文の作成を行った。文章読解を含めた要約の下準備を全体で行ったものの、手紙文作成演習に比べ、学習状況や成果物の個別差が大きかった。

要約文作成演習の終了後、手紙文作成演習と同様、まとめシートを用いて、「①できたこと」「②難しかったこと」「③できなかったこと」の三点によるふりかえりを行った。以下、「①できたこと」の結果を表5および図7、「②難しかったこと」の結果を表6および図8、「③でき

なかったこと」の結果を表7および図9にそれぞれ示す。なお、これらのデータに掲げた「分野」および「項目」とは、自由記述式の回答内容を本演習での学習活動ポイントに即して整理したもので、「文章読解」「文章要約」「表現基礎」三分野全12項目とした。回答者数は、機械情報技術学科39名、バイオ環境工学科29名、土木建築工学科41名である。複数項目を回答している者が多く、回答数の累計は、「①できたこと」140、「②難しかったこと」119、「③できなかったこと」100である。

表5 要約文作成まとめシート「①できたこと」

分野	項目	回答数
文章読解	文章構成：序論・本論・結論	30
	パラグラフ構成	10
	トピックセンテンス抽出	36
	接続詞、指示語、二項対立など	4
	長文を読むこと自体	1
文章要約	定義、手順、方法、必要事項	19
	長文を短くまとめること自体	8
	内容の精選、主題の正確さ	7
	字数制限（超過・不足）	20
	文章のまとめ方、文のつなぎ方	2
表現基礎	表記（漢字、文字バランス）	2
	文章を書くこと自体	1

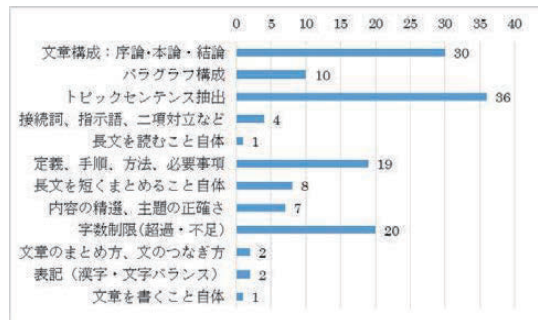


図7 要約文作成まとめシート「①できたこと」

表5および図7の「①できたこと」として、文章読解における文章構成や各段落の役割、トピックセンテンスの重要性に関する理解度はそれぞれ30名、36名と高い。ついで、文章要約の定義や



手順、字数制限に関わるルールについてもおおむね理解しているとみなしてよい。少数だが、長文を読むこと、短くまとめること、文章を書くこと自体を行えたことを挙げた例も見られる。

表6 要約文作成まとめシート「②難しかったこと」

分野	項目	回答数
文章読解	文章構成：序論・本論・結論	3
	パラグラフ構成	0
	トピックセンテンス抽出	29
	接続詞、指示語、二項対立など	2
	長文を読むこと自体	7
文章要約	定義、手順、方法、必要事項	0
	長文を短くまとめること自体	13
	内容の精選、主題の正確さ	27
	字数制限（超過・不足）	24
	文章のまとめ方、文のつなぎ方	11
表現基礎	表記（漢字、文字バランス）	1
	文章を書くこと自体	2

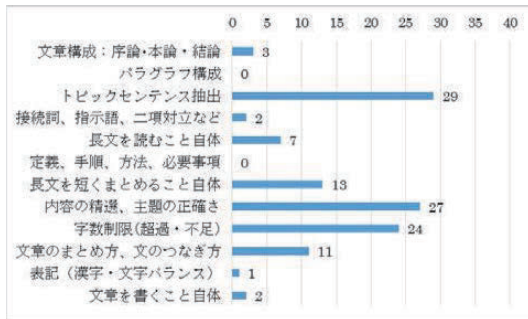


図8 要約文作成まとめシート「②難しかったこと」

表6および図8の「②難しかったこと」については、文章読解および文章要約におけるトピックセンテンスの重要性は理解しているが、トピックセンテンスの的確な抽出、および、制限字数に合わせたトピックセンテンスの取捨選択に難しさを感じた層がそれぞれ29名、27名と圧倒的に多いことがわかる。これは、文章要約の問題というより文章読解レベルの訓練不足であろう。第1章で述べた「授業前アンケート」によると、文章読解分野に対する不得意意識の割合は他分野に比して低いという結果であったが、学習者

の実質的な文章読解力とは隔たりがあると思われる。なかには、長文を読むこと自体が難しいと回答したのが7名、長文を短くまとめること自体が難しいと回答したのが13名おり、長文課題そのものに慣れておらず作業に相当の困難さを感じている学習者が少なくないことがわかった。こうした学習者は、成果物を見ても問題が多い。時間内に要約文を完成できない、要約ではなく感想文や意見文を述べている、記述内容に誤りがある（有効なトピックセンテンスを抽出できていない）などである。これに対し、成果物においてトピックセンテンスの抽出や取捨選択ができている上位層は、抽出した各センテンスをうまくつなげられているか、一つの文章としてまとまっているかといったより高次の表現レベルについて難しさを感じていると回答している。

表7 要約文作成まとめシート「③できなかったこと」

分野	項目	回答数
文章読解	文章構成：序論・本論・結論	2
	パラグラフ構成	0
	トピックセンテンス抽出	16
	接続詞、指示語、二項対立など	3
	長文を読むこと自体	0
文章要約	定義、手順、方法、必要事項	0
	長文を短くまとめること自体	10
	内容の精選、主題の正確さ	9
	字数制限（超過・不足）	16
	文章のまとめ方、文のつなぎ方	40
表現基礎	表記（漢字、文字バランス）	1
	文章を書くこと自体	3

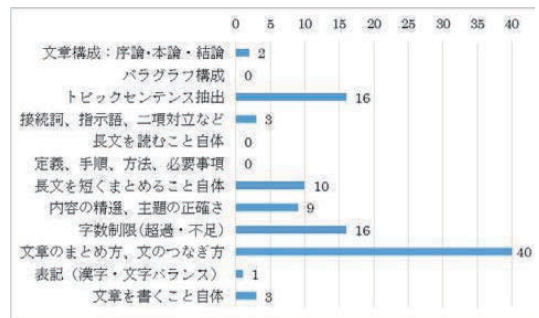


図9 要約文作成まとめシート「③できなかったこと」

表7および図9の「③できなかったこと」に関しては、成果物のクオリティに応じて傾向が二つに分かれた。長文読解レベルで問題を抱えている層、つまり、トピックセンテンスの抽出や筆者の主張の理解、字数制限のクリアができなかったと回答した層は、実際に成果物のクオリティも低かった。大幅な字数不足や超過や内容重複など、要約文として不備なものが多い。少数ではあるが、自分の意見や解釈を記述するなど、要約文の定義から大きく逸脱したものも見られた。これに対し、文章読解や要約文ができている層は、内容の精選、文の接続や文章としてのまとまりを課題としていることがわかった。

## 2.4 データ分析文作成

大学では、実験や調査を通して得たデータを整理・分析し、レポートや論文にまとめたり、口頭発表を行ったりする機会が多い。実験や調査などで得たデータを根拠として自分の意見を述べる場合、その前提としてデータの分析結果を正確にわかりやすく文章で表現する力が必要である。そこで、三つ目の演習として、テキストの演習問題に提示されたグラフ・表を読み取って、その分析文を作成する課題を課す予定である。平成27年12月時点ではまだ実施されていないため、ここでは実施予定内容を述べる。前半にデータ分析に関わる基本的な事項、たとえば、調査・実験結果を踏まえた論理的文章の構成、データ分析文における日本語表現上の注意事項などに関する説明を行った後、テキストに提示された二種のグラフ・表に関して調査方法および分析結果の記述を行わせる予定である。

## 2.5 まとめ

以上、「日本語表現法」における文章作成演習の実施状況、および、まとめシートの結果に関して述べた。本演習は、自分の考えをゼロの状態から構築して文章化するという課題ではなく、手順や必要事項を理解したうえで、フォーマットや見本、論説文の一部分をアレンジしたりつなげたりすること、つまり、既に文として

存在するものを活用してまとまりのある文章を作成するという内容であったため、学習者は比較的取り組みやすかったようである。手書きのスピードに個人差はあるが、作成作業に大幅な遅れは少なく、要約文のごく少数の未完成者を除き、ほぼ全員が成果物を提出できた。しかし、文章作成における問題点は学習者によって異なり、多様であることがわかった。これに関しては、本演習の成果物や「授業前アンケート」結果、さらには定期試験成績等との相関など詳細な分析が必要となるが、ここでは、成果物を大まかに上位・中位・下位の三層にわけたうえで、その傾向を簡潔にまとめておく。上位層は、文章作成に関する理解・実践が十分であり、より分かりやすい表現の工夫や応用的要素の加味に意欲的なことがわかった。中位層は、文章作成に必要な基本的知識の理解は十分であるが、それを有効に活用する段階でのつまずきや応用力不足が見られ、この点をトレーニングする必要がある。下位層は、文章を読む・書くという作業自体に苦手意識や困難さを感じており、表記やレイアウトなどごく基礎的なレベルでつまずくことも多く、敬語表現や論理的文章の読解・要約といった難易度の高い項目には段階的な指導が必要である。総じて、学習者は文章作成の反復学習やノウハウの活用機会が必要だと捉えており、今後の継続学習や他科目との具体的な連携が求められるところである。

## 3. 主題別ゼミナール I

### 3.1 科目概要

「主題別ゼミナール I」は、「日本語表現法」と同じく全学部全学科1学年後期に開講される選択の総合教養科目の一つである。この科目は、主に総合教養科目の教員が自身の専門分野に関する講義を行うものであり、学生は、シラバスを確認し興味のある講義を選択する。

岩崎の講義内容は、主として方言を提示しており、他に役割語や位相語も扱う。平成27年度は

81名が履修している（再履修生を除く）。学科別に見ると、機械情報技術学科14名、電気電子システム学科10名、バイオ環境工学科9名、システム情報工学科6名、土木建築学科31名、感性デザイン学科11名となっている。

本科目の教育目標は、日本語、特に方言に対する理解を深め、それを踏まえてレポートや小論文で自分の考えを論述できるようになることである。毎時使用するテキストはないが、参考文献として木部暢子ほか編集『方言学入門』<sup>2)</sup>、金水敏『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』<sup>3)</sup>、米川明彦『若者語を科学する』<sup>4)</sup>などを用いる。

以下、「主題別ゼミナールⅠ」の授業計画および講義で扱う主な項目を表8に示す。

表8 「主題別ゼミナールⅠ」授業計画

授業回	分野	項目
第1回	導入	ガイダンス、方言クイズ
第2回		方言概論
第3回	方言	青森県の方言
第4回		東北地方の方言、方言地図
第5回		東日本方言
第6回		西日本方言
第7回		コスプレ方言、文章作成
第8回		方言総括
第9回～ 第10回	位相語	キャンパス語、若者ことば
第11回～ 第12回	役割語	役割語
第13回		役割語総括
第14回～ 第15回	総括	全体の復習、総括
第16回	試験	

表8のうち、文章作成課題を課しているのは、次の三つの演習である。

- 1) 要約による文章作成（第8回 方言総括）
- 2) 条件による文章作成（第13回 役割語）
- 3) 自由記述の文章作成（第15回 全体総括）

この科目で取り扱う内容は、大きく「方言」と「役割語」に分かれており、三演習は「方言」の総括と「役割語」の総括、そして最終的

な総括の各段階で行う。なお、これらの演習は成績評価に含まれ、各10点を担っている。これに定期試験の70点を加え、計100点で評価する。

本演習のふりかえりに使用した「文章作成まとめシート」の結果に関しては、次項でそれぞれ詳しく述べることにする。ただし、まとめシートの結果は、平成27年12月までに実施されたものを扱うことにする。

### 3.2 要約文の作成

方言の講義に対する総括として、徳川宗賢『日本の方言地図』<sup>5)</sup>の「居る—東西の対立—」を400字以上800字以内で要約するという課題を課した。方言に東西差があることなど専門的な知識に対する理解を踏まえたうえで、文章の読解と要約を行った。

授業の進め方は、次のとおりである。はじめに、授業担当者が文章作成に関する基本的な事項、たとえば文章構成、話し言葉と書き言葉の区別などに関して説明を行った。その後、40分～50分程度の時間を設け、文章作成に取り組みさせた。

学習状況を観察すると、順調に書き進める者と、途中で手が止まる者に分かれる。途中で手が止まる者には個別に指導を行った。

演習が終了してから、まとめシートを用いて、要約文作成を通して、「①できたこと」「②難しかったこと」「③できなかったこと」の三点によるふりかえりを行った。「分野」および「項目」も「日本語表現法」に準じて整理し、「文章作成基礎」（以下、記述基礎と略記）「文章作成応用」（以下、記述応用と略記）「読解」三分野全14項目を得た。回答者は全学科51名である。

以下、「①できたこと」の結果を表9および図10、「②難しかったこと」の結果を表10および図11、「③できなかったこと」の結果を表11および図12にそれぞれ示す。

回答数の累計は、「①できたこと」52、「②難しかったこと」51、「③できなかったこと」46である。複数回答は可としたが、無回答も見られ、結果的に回答者数とほぼ同数となった。

表9 要約文作成まとめシート「①できたこと」

読解	文章構成：序論・本論・結論	5
	パラグラフ構成	1
	トピックセンテンス抽出	4
	長文を読み、趣旨を理解する	9
記述 応用	手順、方法、必要事項	5
	長文を短くまとめる作業自体	11
	字数にあわせた内容精選	0
	字数制限（超過・不足）	8
	文章のまとめ方、文のつなぎ方	3
	客観的な記述	1
記述 基礎	表記（漢字・文字バランス等）	3
	文章を書く作業自体	1
	書き言葉と話し言葉の区別	0
	原稿用紙の使い方	1

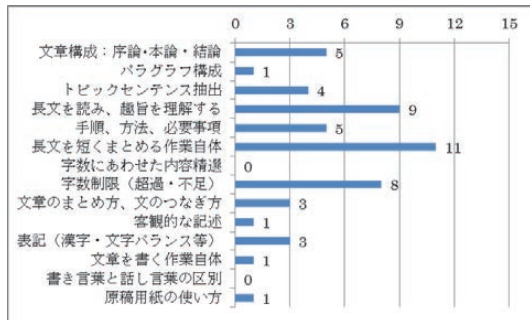


図10 要約文作成まとめシート「①できたこと」

表9および図10の「①できたこと」には、長文を短くまとめる作業と答えた者が11名と最も多いことがわかる。これは回答総数の約2割を占める。次いで、長文の内容を理解できたとする者が9名、800字に近い字数で記述することができたという回答が8名である。長い文章を作成すること自体への達成感もうかがえる。また、点数の高い学習者のなかには、文中の重要箇所を抜き出すことができたと記述していた者もあった。

表10 要約文作成まとめシート「②難しかったこと」

読解	文章構成：序論・本論・結論	1
	パラグラフ構成	1
	トピックセンテンス抽出	2
	長文を読み、趣旨を理解する	5
記述 応用	手順、方法、必要事項	7
	長文を短くまとめる作業自体	15
	字数にあわせた内容精選	5
	字数制限（超過・不足）	9
	文章のまとめ方、文のつなぎ方	2
	客観的な記述	0
記述 基礎	表記（漢字・文字バランス等）	1
	文章を書く作業自体	3
	書き言葉と話し言葉の区別	0
	原稿用紙の使い方	0

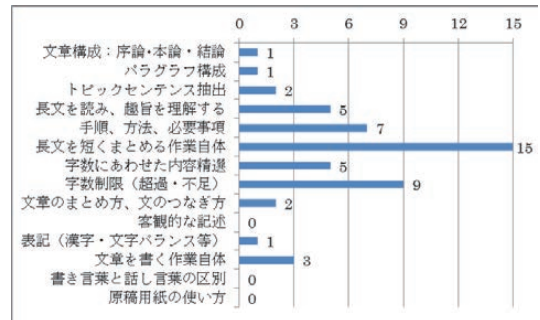


図11 要約文作成まとめシート「②難しかったこと」

表10および図11の「②難しかったこと」についても、長文を短くまとめる作業を選ぶ者が最も多く、15名である。これは回答総数の約3割を占める。次いで、字数制限を守ることが難しいと感じた学習者が9名である。

表記（漢字・文字バランス等）と文章を書く作業自体を挙げる学習者もあり、「日本語表現法」同様、文章を書くという作業自体に困難さを感じている学習者が存在することが明らかである。



表11 要約文作成まとめシート「③できなかったこと」

読解	文章構成：序論・本論・結論	0
	パラグラフ構成	0
	トピックセンテンス抽出	1
	長文を読み、趣旨を理解する	1
記述 応用	手順、方法、必要事項	10
	長文を短くまとめる作業自体	9
	字数にあわせた内容精選	4
	字数制限（超過・不足）	5
	文章のまとめ方、文のつなぎ方	4
	客観的な記述	4
記述 基礎	表記（漢字・文字バランス等）	5
	文章を書く作業自体	1
	書き言葉と話し言葉の区別	1
	原稿用紙の使い方	1

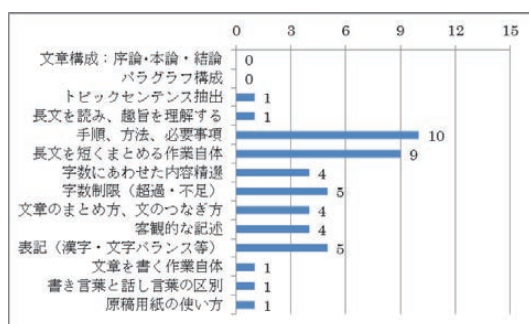


図12 要約文作成まとめシート「③できなかったこと」

表11および図12の「③できなかったこと」には、必要事項を抜き出せなかったとする学習者が10名で最も多く、次に長文を短くまとめる作業と答えた学習者が9名である。長文をまとめる作業は、「②難しかったこと」にも挙げられており、多くの学習者が課題に感じていると推測される。

また、解答用紙返却後、要約作文では自身の考えを述べるのではなく、筆者の主張を理解したうえで客観的に述べる必要があるという解説を行ったためか、文章が客観的でなかったという記述も得られた。

最後に、成績評価との関連について述べる。前述のとおり、本課題は10点満点で成績評価に含まれる。要約記述を解答した学習者は70名、平均点は7.0点で、最高点は10点、最低点は5点であっ

た。

また、学習者に、自分で取れると予想していた点数と、実際の点数について記述させた。取れると思った点数と実際の点数の差を±で示すと、表12のようなになる（無回答は除く）。

表12 学生の自己評価と実際の評価の差異

点差	+1	+2	+3	+4	+1~2	+2~4	合計
人数	6	7	4	2	1	1	21
点差	-1	-2	-3	-4	-5	-3~5	合計
人数	6	4	1	1	1	1	14
点差	0						合計
人数	1						1

実際の評価のほうが高かったと答えた学習者が低かったと答えた学習者を上回った。一方で、自己評価と実際の評価が大きく異なる場合もあり、特に実際の評価がマイナスになる学生もいることには注意が必要である。今回は、自分の意見を述べた解答に対する評価が低くなり、自己評価とのずれが大きくなった。文章を作成した学習者が、要約文の趣旨を理解していなかったために起きたことであると考えられる。

こうした自己評価と実際の評価のずれは今後もしばしば生じると予測されるため、解答用紙返却後に評価基準等を説明し、改善に努める必要があると考える。

### 3.3 条件文の作成

「役割語」「位相語」の総括として、「役割語と位相語の違いについて、1000字以上1200字以内で述べよ」という課題を課した。ある条件を守って記述する条件付き作文とし、条件として以下の二つを設けた。この条件が守られなかった場合は減点対象となる。

条件1 次の五つの語を必ず一度は用いること  
（役割語、位相語、現実、仮想現実、若者語）

条件2 具体的な例を踏まえて述べること



なお、「役割語」とは、現実世界とは離れ、専ら漫画やドラマなどで用いられる言葉遣いを指す。たとえば、「博士」や「老人」というキャラクターは、漫画内でしばしば「わしが知っておるんじゃ」とような言葉遣いをする。「位相語」は、社会集団で用いられるもので、男性語や女性語（性差）、若者語（年齢差）が相当するほか、方言（地域差）も含む。

条件作文の記述は、役割語の理解度を確認し、前回の要約作文よりも高度な文章作成を試みることを目的として実施した。

授業の進め方は次のとおりである。はじめに、40分程度でスライドにより役割語に関する復習を行った。その際、学習者には、スライドの内容をメモし、文章作成に活かすよう指示した。その後、解答用紙（原稿用紙）を配布し、残り時間で文章を作成させた。時間制限は行わなかった。条件作文は、進度上、解説が平成28年1月に持ち越されることになったため、解説はせず模範解答とまとめシートを同時に配布し、模範解答と自分の解答を比較させた。

まとめシートは、模範解答と同時に配布し、他課題と同様、「①できたこと」「②難しかったこと」「③できなかったこと」の三点によるふりかえりを行った。「分野」および「項目」も他課題に準じて整理し、「文章作成基礎」（以下、記述基礎と略記）「文章作成応用」（以下、記述応用と略記）「読解」三分野全16項目を得た。回答者は全学科58名である。

次に、「①できたこと」の結果を表13および図13、「②難しかったこと」の結果を表14および図14、「③できなかったこと」の結果を表15および図15にそれぞれ示す。

回答数の累計は、「①できたこと」67、「②難しかったこと」70、「③できなかったこと」73である。前回同様、複数回答や無回答も見られたが、回答数は全体的に増加した。課題提出者の増加も関連すると思われる。

表13 条件作文作成まとめシート「①できたこと」

読解	文章構成：序論・本論・結論	1
	講義内容を理解すること	27
	専門用語を理解すること	0
記述 応用	文章構成：序論・本論・結論	7
	手順、方法、必要事項	9
	メモを取ること	5
	メモを字数以内でまとめる作業	1
	字数にあわせた内容精選	0
	字数制限（超過・不足）	7
	文章のまとめ方、文のつなぎ方	2
	自分の言葉で文章を書くこと	0
記述 基礎	条件を満たすこと	8
	表記（漢字・文字バランス等）	0
	読みやすい文章を書くこと	0
	文章を書く作業自体	0
	原稿用紙の使い方	0

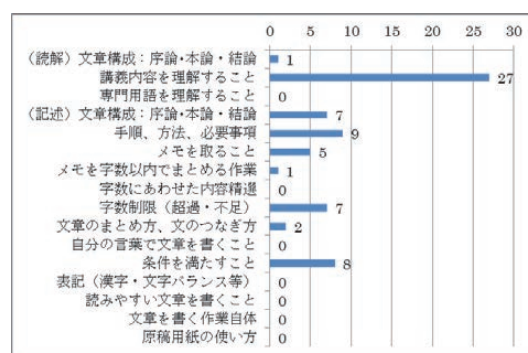


図13 条件作文作成まとめシート「①できたこと」

表13および図13の「①できたこと」には、講義の内容に対する理解という回答が27人と他を圧倒して多かった。専門的な内容を理解し、文章を作成しなければならないことから、妥当な結果であると考えられる。また、条件を満たすことができたという回答も8名あり、条件を守って記述するという趣旨が理解されていることがうかがえる。

「①できたこと」は挙げられた項目が少ないのが特徴で、特に文章作成基礎の項目を回答した学習者はいなかった。

表14 条件文作成まとめシート「②難しかったこと」

読解	文章構成：序論・本論・結論	3
	講義内容を理解すること	4
	専門用語を理解すること	3
記述 応用	文章構成：序論・本論・結論	12
	手順、方法、必要事項	2
	メモを取ることに	3
	メモを字数以内でまとめる作業	3
	字数にあわせた内容精選	3
	字数制限（超過・不足）	17
	文章のまとめ方、文のつなぎ方	4
	自分の言葉で文章を書くこと	4
	条件を満たすこと	6
記述 基礎	表記（漢字・文字バランス等）	1
	読みやすい文章を書くこと	0
	文章を書く作業自体	5
	原稿用紙の使い方	0

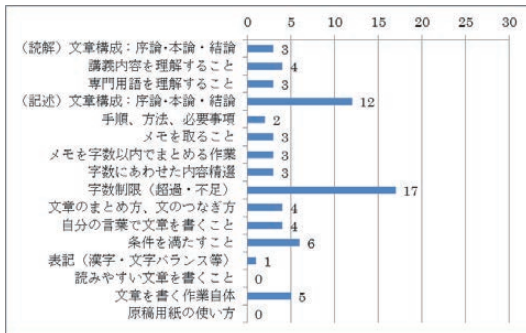


図14 条件文作成まとめシート「②難しかったこと」

表14および図14の「②難しかったこと」には、字数を満たすことと回答した学習者が17名と最も多かった。前回の要約文作成時は400字から800字に比して、今回は1000字から1200字と字数が大幅に増加していることによると考えられる。また、それに伴い、論理的な文章を記述することが難しいと感じているようである。

「①できたこと」に比して、複数項目へのばらつきが見られる。記述の量が増えると、学習者の実力差も出やすくなるのではないかと考えられる。

表15 条件文作成まとめシート「③できなかったこと」

読解	文章構成：序論・本論・結論	3
	講義内容を理解すること	4
	専門用語を理解すること	0
記述 応用	文章構成：序論・本論・結論	15
	手順、方法、必要事項	7
	メモを取ることに	1
	メモを字数以内でまとめる作業	2
	字数にあわせた内容精選	2
	字数制限（超過・不足）	7
	文章のまとめ方、文のつなぎ方	4
	自分の言葉で文章を書くこと	3
	条件を満たすこと	10
記述 基礎	表記（漢字・文字バランス等）	8
	読みやすい文章を書くこと	4
	文章を書く作業自体	2
	原稿用紙の使い方	1

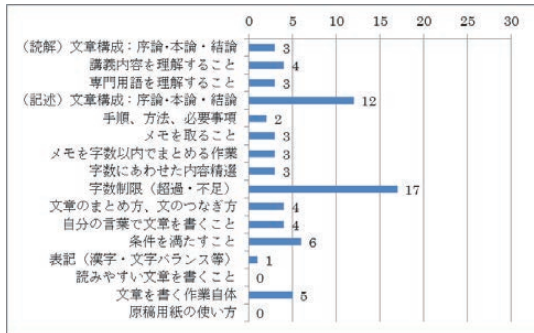


図15 条件文作成まとめシート「③できなかったこと」

表15および図15の「③できなかったこと」には、字数を守れなかったと答えた学生が17名であり、1000字から1200字で文章を構成しまとめることを挙げた者が最も多かった。条件を満たすことについても、もっとと具体例を示したり解説したりして、文字数を増やせばよかったという記述が見られた。

「②難しかったこと」と同様、複数項目へのばらつきが見られる。表記（漢字・文字バランス等）を挙げる者も少なくないことがわかった。

最後に、成績評価との関係について述べる。条件文の作成についても、10点満点で評価する。未提出の学生がいるため解答者数は現時点で60名、

平均点は7.6点、最高点は10点、最低点は4点であった。要約作文を課したときよりも0.6点上昇しており、前回結果よりも点数が上がった学生は33名、下がった学生が11名である。

### 3.4 自由記述文の作成

教育目標を踏まえ、また前二回の課題内容を活かして 15 回目に自由記述文の課題を課す。12月の段階では実施されていないため、課題の狙いと概要のみ示す。

15回目の授業では、これまでの文章作成課題を振り返ったうえで、1000字以上上限なしの自由記述課題を課す。14回目の授業において、「方言の将来について論じる」「小説や漫画の日本語について一作品を取り上げて論じる」「若者語を歴史的な見解を踏まえて論じる」の三つの題目を提示し、15回目までに興味のある題目に関する情報をレポート用紙等に調べさせ、記述させる予定である。

### 3.5 まとめ

文章の要約や、与えられた条件を守るという課題の趣旨については、いずれの演習でも理解されており、受講生の一部は成果物を見ても達成していることが分かる。一方で、要約作文にしても、条件作文にしても、学生にとって常日頃書くことのない文字数の文章を作成することとなり、書く作業自体に困難さを感じている学生もいる。

そのなかで、より取り組みやすいのは要約文の作成である。題材となる文章が手元にあり、文章を作成する能力が極めて低い学生でも原文を写すことで解答が可能である。パラグラフ構成やトピックセンテンスを理解していれば、文章構成も大きく乱れることはなく、誤字脱字も比較的防ぎやすい。一方で、より高度な文章作成能力の養成を目指す段階では、今回の条件記述のように学生が自分で考えて文章を作成するような課題を課すことが望ましいと考える。ただし、その際留意しておくべきこととして、学生のオリジナルの文章を書かせると、添削にも

時間を要することが挙げられる。たとえば、「特徴」を「特徴」と書いたり「現象」を「現象」と書いたりするといった所謂ケアレスミスは、要約文作成時よりも条件文作成時のほうが多かった。

## 4. 文章作成における問題点

「日本語表現法」ならびに「主題別ゼミナールⅠ」で実施した文章作成演習の実施状況およびまとめシートの結果を総括すると、本学学生の文章作成上の問題点は以下のようにまとめられる。

### ① 基礎的な事項

- 1) 文字や文章を書くことそのものを苦手としている学習者もいる
- 2) 誤字脱字や敬体と常体の混同、主述のねじれなどのケアレスミスを繰り返す傾向にある

### ② 応用的な事項

- 1) 文章を作成する基礎はあっても、ある程度の長文（レポート、小論文）を書くのは学習者にとって負担に感じられる
- 2) まとまった小論文作成には、序論の出だしをどのように書くか、結論をどのようにまとめるかなど、作成のプロセスを段階的に指導する必要がある

応用的な事項については、文章作成指導のみでは補えない問題点もある。文献の読解指導も踏まえるなど、国語力全般の強化が求められる。

## 5. 文章作成マニュアル作成に向けて

今回の演習実施を経て、「手紙文やビジネス文書、案内文など形式的な演習」や「ある程度の字数を要する要約文作成課題や条件文作成課題」のようなフォーマットと手順を十分に活用したトレーニングを実施することが有効であることが明らかになった。

一方、学習者間には実力差もある。上位層・

中位層・下位層に対応した文章作成マニュアルを作成することが望ましいと思われる。

なお、北原(2015)<sup>6)</sup>は、以下のような取り組みを紹介している。

筆者は理工系学部の学生に対して「科学技術リテラシー」という授業を行っている。この授業が導入されたのは、ややもすると狭く深くなりがちな理工系学生の学びに対して、科学技術全般の在り方、社会とのかかわりなどを考える機会を与えるためである。一学期間一五回の授業で、毎回一〇〇字程度のエッセーを書かせている。小論文とは言えない分量ではあるが、授業で気付いた点について自分の考えを最後の一〇分でまとめて書いてもらう。一人一人が毎回提出しているエッセーを通して読むと、回を重ねるごとに深い内容となってきたことが分かる。

文章作成に関連するこのような指導手法についても参考にし、文章作成マニュアルを作成する。

## 6. おわりに

以上のとおり、今年度取り組んだ文章作成課題を通じた本学学生における文章作成能力の現状把握について報告した。今回の文章作成課題の実施によって、本学学生の実情に合わせた文章作成マニュアルの作成に向けて、基本的な情報を得ることができたと考える。

今後は、文章作成マニュアルの具体的な内容や、それを生かした教育体制のあり方について検討する。

## 参考文献

- 1) 米田明美, 蔵中さやか, 山上登志美: 大学生のための日本語表現実践ノート, 風間書房, 2010.
- 2) 木部暢子・竹田晃子・田中ゆかり・日高水穂・三井はるみ 編集: 方言学入門, 三省堂, 2013.
- 3) 金水敏: ヴァーチャル日本語 役割語の謎, 岩波書店, 2003.
- 4) 米川明彦: 若者語を科学する, 明治書院, 1998.
- 5) 徳川宗賢: 日本の方言地図, pp.10-13, 1979.
- 6) 北原和夫: 理系の小論文, 日本語学 vol.34-13, 明治書院, 2015.

## 要 旨

本研究は、八戸工業大学における文章作成能力指導の基盤を作ることを目的とする。今年度は、日本語表現科目で実施した文章作成課題に対する学習状況を通して、学生の文章作成能力の現状を把握するとともに、文章作成において生じている問題点の抽出を行う。本研究の成果を活かし、文章作成上の注意事項をまとめた初歩的な文章作成マニュアルを作成する予定である。

**キーワード:** 大学生, 文章作成, 問題点抽出